

JUNJI KONISHI ARTE Y DISEÑO

カルダス県知事紹介文

SOUL を描く

マスター・ジュンジ・コニシは、建設的な日本の協力プログラムの中で 4 年前に、私たちカルダスの文化と芸術の発展支援を目的に来た、日本人の寛大さからの偉大な贈り物です。

マスター・コニシのテクニックやインスピレーションなどの巨大な芸術的感性と無限の経験は、私達県民に期待することができる最高の貢献をもたらしてくれ、私は偉大な贈り物と言いたいです。

尊敬の基礎として雄大さ、勇気、自然への愛、行動に基づいて、独自のスタイルと深さにより、最も文化的表現を教え、人と精神的にアーティストになるための基本をオープンに指導してきました。

フォルムの特徴、その繊細で細かい構図、彼のトーンのマジックタッチ、墨絵技法を取り入れた黒を中心とした持続的に重なり合う色は、コニシの魂の痕跡と言えます。

ポリュビオスは彼の年代記やアルカルディア音楽の山の中での研鑽について関係の歴史家は、過酷な地域では、芸術は悪と暴力を無くし夜明けの厳しさを軽減するために不可欠な要件だったと言っています。

静かな私たちの霊のために香油を掛けていることを期待して、芸術の魂マスター・コニシようこそ。

詩を書くことに挑戦される作家が、この詩的な文を書きました。

“勇敢な戦士は離れて聞く耳を保ちます。
ナイチンゲールの歌”

日本の文化の根底にある勇気と芸術的感性の組み合わせは、魂のアーティスト、マスター・コニシの遺産として、私たちの目に、私たちの心の中に残ります。

エミリオ・エティベリ・メヒア
カルダス県知事

2007 年 9 月

*参考文献 日本魂

JUNJI KONISHI ARTE Y DISEÑO

哲学者カルロス・オスピーナ紹介文 翻訳
コロンビア 2007

ジュンジ・コニシ デザインからの創造

カルロス・アルベルト・オスピーナ・エレラ
カルダス大学哲学科教授

19世紀後半から20世紀初頭で、明治時代(1868年から1912年)は、日本には大きな変化があり、ヨーロッパの芸術に日本美術の影響を与えた西への開口部がある。ヨーロッパの文化の中に、日本人アーティストは文化を取り入れるために素晴らしい魅力を紹介してきた。それらの美的テーマや技術、中国から継承された美学の伝統に忠実に作品に新しい技術を組み込んできた歴史がある。これらの傾向は、一つの文化が他を満たしたとき、多くの場合完全に外国人文化を同化させるか、または新しい次元を創り上げることによると考える。比較するための基準を持って芸術的な形質で見つけるか、自分たちのアイデンティティのユニークで独特な新しい表現を見つけるために、伝統を活かしながら、近代的な提案に統合してきていると思われる。

ジュンジ・コニシ(北海道江別市生まれ 1953)の場合、職業訓練大学校(1977卒業、神奈川)で金属工学を学び、東京芸術大学(1983.東京)で美術を学び、メルボルン RMIT 大学で、大学院オナーズ学士(1991.) 修士(1995)、博士(1999)の課程で研究を続けてきた。彼は2004年まで2年間カルダス大学(マニサレス、コロンビア)の美術科で支援の教授として到着した。視覚芸術の教官と我々の若いアーティストの育成に偉大な貢献と影響を考え、再び2007年まで、2005年に大学及び県、マニサレス市でプログラムの延長を望んだのだが、これらふたつの場面でマニサレス市において彼の存在は大きくなったことと、日本の国際協力機構 JICA、カルダス県とカルダス大学、学科の協力のおかげで可能となった。

始まり

ジュンジ・コニシの性格は喜びと他人に対処する個人的なシンプルさと東洋的な安らぎを反映している。彼の穏やかな人柄と技術教育から始まった創作は、アカデミックプログラムの中で発展し、芸術のために彼は金属加工法の指導という職業の中、挑戦を続けてきた。まだ、手に金属、ハンマーと言う作業に彼らのマンパワーメントのプロセスが生きている間、彼は技術的な訓練を超えて自分の仕事の製品の

単なる機能を超越する衝動を感じ、被の手の中に不活性物質、工業用アセンブリの原料以上の何かに変換し、自分自身の自律的な生活、機能デザインを吹き込んだ。

7

彼は鋼を芸術として捉えることを望み、デザイン指導の中で活かそうと続けるが、可能ではあったものの限界を感じていた。ただひとりのアーティスト、ジュンジ・コニシは、その環境に苦しみ職場での進む道を失った。1983年に始まって以来、それまで続けてきた、青森県(日本)での金属加工の講師として指導を終えた後、美術、教育の両方で彼の人生を捧げることを決めたことは決して偶然ではなかっただろう。

彼の孤独な存在の活力は、芸術的創造とその弟子たちへの技と知識の伝道と寛大な暖かさが与えている。彼の創作法は彼の仲間たちが受け継ぐものと考えられる。意志のなすがままに無の状態を受け入れることができるジュンジ・コニシである。すべての作品は彼の精神が作る内面のエネルギーの表現であるということを見出し美しいと思うところである。それは単に実用的機能を支持して独自の美を失うことに対し、自然と自身の精神の求めに近づくため、芸術的感性に耳を傾けることだと言えるだろう。

3次元作品

技術と材料は最終的に人間の意志を受け、その作品において思った以上の素材を作る。しかし美しさをどう表現するのかと言う美的感性は別であり、そこを問わなくてはならないだろう。コニシは、創造の行為は多くの場合、物事への問いかけであると言っている。また創造的衝動を何より大切にしていると語っている。

日本とオーストラリアで創られた彼の作品の中には、ランプ、燭台、デカンタ、フルーツボウル、花瓶、ティーセット、カップのセットなどの家庭用オブジェをデザインそして製作したものと、彫刻造形で構成され、ステンレス・スチール、鉄、銅、金、銀、木など様々な素材を使用しているものがある。ジュンジ・コニシの作品の多くは非対称フォルム、オーガニックフォルムであるが、リズムカルなバランスによってダイナミックなムーブメントを創り上げている。河原を渡って飛行するかのように明るい空間フォーム、塩と胡椒のシェーカーや砂糖とミルク入れなどお茶の時間のために使えるものもあり、ユニークながらその作品が与えるイメージを表現している。

ステンレス鋼と銀は、その羽ばたきが繊細な蝶を思わせるものもあり花器の上に座るか、鮮やかなフルーツを置くボウルとして表現している。また花を歓迎するために口を開けたように、自分の身体のバランスをとる奇妙な海の生き物の銅のムーブメントやグループ化され友達が会話するような形が配置さ

れているように見えるリキュールカップ(シルバーとゴールドメッキの内側)、これらに基本的アイデンティティが見受けられ

8

る。喉の渇きを癒すための水やワインを探している男に幸運な黄金の水差しとコップ、純金で制作するため、コニシは素材に向き合い、最大限、材料からの利用率で湾曲した形状を創り上げた。特に純金は価格が高く重くもなるが、やり遂げることで新しい出発も始まり、それは多くの作品に共通する精神でもあった。日常、物事の魅力は私たちが住んでいる環境の中で見つけることができるが、この世界にいることの素晴らしい眺めと、我々は単なる外見で見ることが出来ない、魔法のような世界をコニシの作品の中に見ることができる。

美しさと機能の間の緊張は、素材と加工プロセスの流れの中でのフォルムの美しさとバランスを考える。機能的品質を提供し、単なる装飾として創造することとは異なると考える。製品デザインでは、例えば、それは機能性に重点を置き、装飾品としての美しさをも想定している。コニシの創作は日常の人間の存在の一部にあり、彼のジュエリー、燭台、花器、塩胡椒入れ、フルーツボウル、水差し、ランプに表現されるように、審美と機能の間における有効的なバランスを常に求める形の美として創り上げている。傾くような動きは、意外かつエレガントな形につながっており金属素材の存在感を表現したオブジェである。このようなフォルムやバランスは間違いなく彫刻造形にも生かされておりコニシの芸術性と言うことができる。

ジュンジ・コニシのこの芸術的進化は、彼の作品群の中、機能性の強い存在感からのフォルムの優位性にだけでなく、具象から抽象に幅を広げてきた。彼の芸術作品は金属造形、金属工芸、彫刻での表現方法であり、表現形式の限界を打破する必要があった。千の方法がある絵画や版画は、コロンピアを中心に集中した創作であった。境界を破る衝動は、おそらく彼がメルボルンでの創作研究(オーストラリア)とマニサレス(コロンピア)における大学での指導への必要性から、他の文化に遭遇するために発生したものである。コニシは表現の新しいスタイルを見つける手段を教官、学生とともに実践してきたと言える。

アーティストの歴史は伝統と創造性を繰り返している。コニシは“独創的なものづくり”の可能性を見つけようと追及している。彼は言う、「デザインは自己主張とともに、求める相手のことを考えなければならない、そのプロセスが必要だろう。美術の概念は、自己主張であり己の概念の表現でありアクションと考えている。」。初期の職業訓練の指導の中から、彼は職人のプロセスの価値だけでなく、創造性と言う種類のツールを使用して有用性を学んだ。彼の努力と芸術の創作へのかかわりは、創造的なプロセス、材料の構成と組織によって、作品が出来上がることであった。

彼の芸術作品の段階として、すべてのこれらの考えは、シンプルさとともに、アジアの文化的、精神的なものがとても深く、自己の何かによって動かされている。西洋のフォルムや曲線のシンプルさとともに非対称性だけでなく、すべてが感を与えており、おそらくそれらを意識するように、彼の作品においては、流れる形の特徴を持つ動きとダイナミクスを表現しているのではないだろうか。

木の彫刻「炎」は、空間に浮かぶ炎の動きを見ることができる。コニシはまた、文字通りその動きから、リズムカルと一緒に動く表現として対の構成を使っている。またコニシは次のように述べている。「私の芸術は創造性にあり、非生物物質を発見しているようなもの。これらの滑らかで柔らかい表面は海洋生物や新生物のように主な形を呼び起こす。」彼の最も大きな影響の一つ、彫刻家コンスタンティン・ブランクーシ(1876—1957)は、“それは物事の外側表面を模倣し、現実であることを表現することは不可能である”と述べている。それとともに東洋思想に影響を持つコニシである。アーティストは自分の夢を具現化し、そのビジョンを形作ることができることこそ本質と言えよう。

コニシが「平和ⅠおよびⅡの壁、平和のスペース」を提案したとき、平和のその空間を創るために、作業性をどのように構築するかも考えなくてはならなかったと言う。それは、金属の自然な性質を科用した銅の酸化は、すべての時間を通して私たちに与える自然の神聖な存在(グリーンフォーム)を連想させたり、ステンレス鋼のフラットシートは磨く人間の質量の大きな力を与えたりである。コニシはそれらを熟慮し、未来に目を向け、ハーモニーとフォルムで構成する要素のバランスを組み立てている。コニシはオーストラリア時代、彫刻家である師、アキオ・マキガワ、メルボルン(オーストラリア)から多くを学んだ。

コニシの芸術に見える日本の精神

平和の話題、将来の夢と希望は、彼が最初の年 2002 年にコロンビアに来たときからジュンジ・コニシはこのプロジェクトに大きな影響を与えている。これらは暴力、疫病と将来絶え間ない問題であり、コロンビアの様な国では同様に強く発生する可能性がある問題である。特に、日本の国際協力機構-JICA の支援によって、

コニシは美術教育支援の形でこれらの問題に取り組んできたのである。金属や木材で作品を作成し指導プログラムを作り実践してきたが、彫刻、立体造形が中心だった最初の訪問時と、絵画や版画に時間を費やした 2 度目がある。ステンレス鋼ⅠとⅡ型インテリアとして作られた 2 彫刻はアッパーボディが半透明の細長い様式化

されたグリッドであり、密封された底による作品である。コロンビアでコニシのアイデアが形を成した
ものとして表現されている。

1990年にオーストラリアに渡ったコニシは帰国の前に日本、海外での美術教育に携わる希望を抱いて
いた。今回は絵画や彫刻について、私たちの学生や教官に日本の伝統美術の技法を指導、支援するために
プロジェクトは認められた。おそらく最も重要なのは、日本人の精神、東洋文化の魂を、学ぶ可能性があ
ったことであり、特に彼の絵画ではよく見ることができる。これらの作品は、オーストラリアでの欧米
の現代美術との出会いにも、自己のルーツに対応していると考えられるが、コロンビアの現実の側面を
伝えてもいる。

コロンビアにおいては、強い精神力を持って、文化向上と平和志向を考えること、その精神力を美術
で表現しようとの意味を言ってきた。最も宗教的な神道、神聖な信仰、いくつかの見えない力があり
動的な力の存在を信じるものである。高尚さと謙虚さは世界中のすべての生き物に存在し道路の小石、
か弱い草花、花こう岩、金、昆虫、風、雨、霧、火山、人・・・すべての物は、神聖な力を有している。
コニシにとって形や色のリズムはこれらの力への対処療法的方法と言える。単純な形のオブジェにも簡
素化の方向性は、日本の美的精神があると考えられる。

それはコニシが日本文化の禅思想のわびさびの精神が基盤にあることをよく承知している。わびは信
頼性と謙虚さ、また、自然なその形態の自発的な美を表し、さびは、孤独の趣と沈黙、空虚と虚無の重要
性を説いている。コニシが西洋の造形に影響があったことを示している、それだけではないものを表
現している。その影響は、わびさびを通しネイティブ日本人としての経験、新しい主題と表現の新しい
方法によるものだろう。コニシは、東と西を区別することなく世界で自由に渡り歩く。絵画はまた、彫刻
より柔軟に学生達の創作活動に新しい視野を与える良い機会となり、立体作品は技術的に詳細を取得す
るのは時間的に制限されている中、

難しいということであった。しかし彼らは創造的な自由を考え、彫刻、立体造形に、ダイナミズム、エネ
ルギー、形の表現力やデザインの創造力の必要性を理解できたのは確かである。

絵画

仏教と神道は日本美術に大きな精神的な影響を与えてきた。ジュンジ・コニシは、西洋での思考を考

えながら、生まれ住んだ日本の思想感を理解するようになった。伝統的な茶道の中にも、これらは見出すことが出来る。例えば茶人、勅使川原のような創造的精神であろう。ゴンブリッチは、禅仏教がギリシヤ絵画のようなプレルネサンスヨーロッパ思想と違って、中国と日本の東洋の画家の思想の間に導入されていったと述べている。これは東洋の画家の作品と彼の作品が純粋な表面上の違いだけではないためであった。コニシの創作プロセスの中では、視覚だけではなく、瞑想も大切であり、私たちは西洋の美学から学んだように、記憶を旅し、その古代の文化的遺産と歴史から無限に影響を受けている。彼の絵画にもそれらを感じ、独自の空間を展開している。

コニシは一瞬の感情に集中し、自己の精神で物事を見ようと考えている。形状、色、配置はプロセスの中で具現化されていく。日本では木、山や花のようなものを絵画の基本として学び、スケッチをした後、心と記憶にあつた“感覚の風景”を再構築したと言う。現象の取り込みを記録するノートを書くように、コニシは、シンプルさ、最小の精神構造の中スケッチで構成し、デザインを描き感情を起こす。何かをじっと見て、彼は再び何度もスケッチをすると言う。多くの時間をかけ神聖な真実を反映することによる瞑想心によりアイデアを設定し、それを逸脱することなく、すべての側面からそれを見て同様のプロセスを続けていく。創造的なプロセスは、芸術的な創作時間につながるようである。

13

神は(DIO)アーティスト(SEGNO ディ・ディオ)の心で物事の道(SEGNO)を示し、神によって魂の中のオブジェを創作する精神的思想のようであるとマニエリスムは述べている。神のインスピレーションとしてではなく、プロセスの実践を通して、現実を作家として捉えることが不可欠であり、コニシのデザインは本質的なものを捉えようとしている。

マニサレスの町を表現した木版画「ケーブルタワー」は、彼の詩的なビジョンで、その表現の美しさを私たちの前に示した。この場所に住んでいる我々は、都市の持つ魅力やサイレントな雨や霧を創造することができる。マニサレスでの風景など全体的に少数のこれらの作品は、彼の木版画に穏やかな感情や風景の素晴らしきを感じさせるものである。

コニシは希望、未来、平和などの形而上学的な理想を表現するなど、墨絵などの日本の伝統的な技術を用いて、金と銀箔の輝きとともに色、形を駆使し、抽象的な表現によって人間の神聖な内部の感情を表現している。日本画、墨絵の技法は、歴史的に雪舟、禅宗の僧などによって15世紀に生まれ、黒色は基本的に墨で構成されている。日本の書道の特性を考えてみるとわかりやすい。そして黒以外の他の色を統合するために進化した。日本画は、金と銀箔の使用を含む17世紀の技術である。

ジュンジ・コニシの絵画では彫刻作品から考慮すると抽象的分野と捉えることができる。色のコントラスト、強力なブラシストロークにより、その不規則な輪郭は構図に組み込まれ、金と銀箔の一定の存

在は、彼の絵画に存在感を与えている。抽象絵画と東洋の精神を我々は審美的に捉えているがコニシの作品の場合、余計な装飾は使わない表現である。彼の絵画を楽しむことは、それが芸術として評価することを妨げるものではないにしろ、そのために理解されるものではない。しかし絵画の創作活動はわずか4年前から取り組んでいるのである。最初にマニサレスに来たときからと、つまり、彼の絵画作品のほとんどのテーマはコロンビアそのものと言える。

コニシの絵画では純粋な抽象化の傾向にある。いくつかのケースの中ではノアの箱舟 I およびIIである。舟は抽象的輪郭を表現しているが、箱舟の姿は、特に最初の絵に強調されている。実際にコロンビアではこの

14

ような災害は今考えることはない。洪水の闇と緑の自然、動物や植物が、船を災害からの避難として表現したのだろうか。黒の背景、不透明な洪水の闇が広がるときに、太陽がかろうじて入り込み、明るく暖かくまぶしさを感じさせる。ノアの箱舟 I およびIIで、コニシは、魅力的な反射のような太陽は希望ではあるが、選ばれて箱舟に乗ったいくつかのためではなく、すべてのために考えていたと思われる。

コニシの絵画作品には3つの非常に重要な要素がある。まず、赤色で表現するリンク、エネルギー、情熱、希望である。第二に、金と銀箔がそれぞれの両極で表される要素で、日本から持ってきた技法を使用している。そして最後に、黒色を伴う日本の墨絵技法である。

レッドライン(1, 2, 3, …9)、レッドドット(1, 2, 3, …8)、ラインとレッドドットが題する絵画の最初のシリーズである大型アSEMBリ(1, 2, 3, 4)について、我々は、黒い渦が暗さやさまざまな問題点を表現していることを知っている。加えて、魅惑的な物の美しさは線、ストローク、色により構成されている。一見明白なこれらの絵画のタイトルはコロンビアの未来を期待するものだと理解している。

未来への希望は、強力なまま落胆と衰弱に対し大きな励みを照らす。我々は未来に向けてコロンビアが暗い要素的な様々な問題を克服することを願っている。コニシの独自の創作は、目に見える抽象的なシンボルであるとともにアイデンティティの表現である。しかし、何を考え、何を外部の現実から感じるかは、様々な要素との関係に意味していると考ええる。

大きな困難と混乱の状況でコロンビアを取り巻く未来についての3つの作品であるが、色のフラットスタイルに見えた絵画です。サークル未来へI、IIおよびIIIは、過程と希望を表現し、それは円が予想されていた

15

かのように、魅力的なわび・さびの心で表現されている。コロンビアにおいて失われている世界を克服するためのアプローチを表現、金の楕円は中心部に到達するために侵入し、未来を切り開くイメージを表している。エネルギーと情熱、未来、赤い楕円形は平和と達成の強い夢を表す。青楕円形、緑色楕円形などは期待を表している。緑と青の楕円の外側にある、いくつかの黒い点は、物事を改善するための小さな努力を表している。暗闇の中で赤の楕円形は深い闇の中で、未来への期待が示されている。

困難な時代を克服するための対話の価値を強調することが重要で、私はVIには2つのフォルムの繋がりを考えるのである。この対話にはコロンビアの抱える問題、課題が含まれている。コロンビアは人々の間で団結の必要性、文化的改善を図ろうとするとき、西東部独自の個人主義に直面しており、集団倫理に対応している。金箔によるデザインは彼の絵画の中で暴力、不平等、不公平では輝けない暗闇の中からの未来の姿を表現している。

結論

コニシの平面作品、立体作品の中には、物事の魂を見つけるために、希望と現実を抱えながら生きる人々が見える。デザインの創造力はグローバルな存在感を与えており、自律的な人間が物質に生命を吹き込むような絵画であると言える。コニシの精神や感情は、コロンビアの中にあった。コロンビアの現実、精神的な振動を目覚めさせ変貌させることも可能であろう。微妙な色のコントラストが、曲線や斜線、はっきりと明確な視覚効果で大胆に表現した美しさである。

しかし、コニシは芸術的創造のための条件として、パッションとエネルギーを表現する美の追求、規律と仕事を教え、デザインとプロセスが創作の一部であり、最終的に本質を表現するため必要であると考えている。様々な影響の元、自己の本質を形成して行き、それは、自分探しの行程とも言えるだろう。それらを探し出すまでは、反復と模倣もひとつの技術の修練と成り得る。コニシはカルダス大学で美術学生を教える中、アーティストとして技術的な習得と創造的なインスピレーションを指導してきた。

重要なことは、コニシは、ヘーゲルの“芸術の究極の使命”と同様に、高い現実敏感であることの点で彼の芸術活動を考えることを忘れてはならない。多くを学んできた教官、学生達は、単に日本のスタイルを取り入れたり、書道のパフォーマンスを真似したりしないで彼から学んできたこと、そして、本当の深さの真実によって芸術と人生に向かってもらいたいものである。ジュンジ・コニシは一人の日本の詩人として、“巨匠の足跡をたどりなさい。彼らが求めたものを見つけられるから。”と述べるだろう。